

一九九八年度

## 国語（中三卒論）

中学三年生に卒業共同論文を課すようになってから、ちょうど四半世紀が過ぎた。この間、「方法」について、何度か変更を加えてきたが、この学年から新たに始めたことが二つある。

一、中学二年生の段階で、授業中に班ごとに分かれて共同研究をさせ、「研究の方法」「共同作業の方法」「レジユメの作成方法」「発表の方法」を学ばせた。この学年は研究対象として夏目漱石の「坊ちゃん」を選定した。

二、中学三年生の一学期に、「論文」とは何か、「論ずる」とはどういうことを学ばせる。この学年では、芥川龍之介「羅生門」の学習の後に、「羅生門」に関する学術論文二編を提示し、具体的な書き方や引用の仕方などを学ばせた。

卒業共同論文は、何よりも「共同」に重点がある。主体的に作品とかかわることを前提として、他者との間できちんとした「言葉の交流」が可能になるようにとの願いからである。ところが、自分で考えることなしに、参考文献に頼り切ったような卒論も少なくない。その参考文献の一つにこの『論集』自体が

なっていたりするのだが、着想の無断盗用など見過ごすことのない現象もある。

今年の卒論から次の四編を選んだ。いずれも、今後の卒論制作の「あり方」について参考になるようにとの観点からの選定である。

「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」論 心の行方・人の行方（一二六枚）

全章にわたって着実に、まず問題設定をし、それを検討・考察して答を出していくやり方は、不器用だが、実に論理的に明晰で、説得力がある。しかも、全章にわたって論の出来にムラがない。かつ各章が有機的に連結している。「私」の問題を「愛」と「自閉」というキーワードで説明し、またこの世界のあり方として、「愛」と「他者との関係性」を鍵に説明しているところもよい。本論の一部と結論を掲載した。

「沈黙」論 日本人に求めた信仰（六七枚）

この論文の山場は、本論の「遠藤周作が求めた神の姿」の章にある。特に「神は（存在ではなく）働きである」という指摘ちよつと断言しすぎだと思うが、もつと深い宗教論へ届ききかけになる要素を持っている。本論の一部を掲載した。

「黒い雨」 重松と鯉（七四枚）

序論の部分 テーマ決定までの経緯がよくわかるだけでなく

実に地道な検討をしていること。これは高く評価できる。本論においても、いくつかの角度から分析をしているが、それぞれ最終的に重松と鯉との関係に収斂させるという枠組みがしっかりしているので、安定した記述になっている。序論と結論を掲載した。

「ひかりこけ」論(八二枚)

参考資料・文献をうまく使いこなしている。「司馬遷」「審判」など泰淳の他の作品との関連についてもうまく論じているが、「生き恥をさらす」「運命」などの観点を、もつすこし本論に食い込ませてほしかった。また、「光の輪」を「生きるために放つ」とと普遍化したところはよいのだが、それを現代(文明)批判の枠の中だけで論じてしまったのは残念である。本論を踏まえれば、人間のもっと根源的な「罪」や「苦」に至ることも出来たろうし、それを《我儘》しながら生きざるを得ない人間の哀しさにも思い至ることが出来たろう。ここではなんでも「諸行無常」に結びつける安易さはいただけなが、比較的まとまった結論を掲載した。

(山内 修)

「芽むしり仔撃ち」論

狂気の時代と主体性(八九枚)

他にも優れた作品は多くあったが、その中で、本論は、「作品を丁寧読み込む」という姿勢が最も良く表れた作品である。「芽むしり仔撃ち」を研究対象とした班は少なく、作品内容と

して難解なものを持っている本作品に対して、論者は作品の「言葉」そのものに真つ正面に向き合い、自らの言葉でそれを意味づけようと試みる。

第一章では、「作品内の社会状況」として「戦争」という状況あるいは主人公とそれを取り囲む「大人」達との関係性について扱い、第二章では、作品内の他の「子ども」達との差違化を通じて、主人公の人物像を描き、作品のテーマ性について模索する。これらの作業は一見「基礎分析」にも見えるが、こうして文章化されるまでには、当然多くの論考がなされており、それが本論に説得性を持たせている。そして、第三章・第四章では、大江の他作品との比較研究を通じて、作品に底通するテーマ性について論じ、本論全体に厚みを与えている。

先行論文などに振り回されることも多く見られる卒業論文のなかで、彼等が特異性を持っているように感じられるのは、本論が、作品を丁寧に扱い、作品の言葉をじっくりと解釈し、構造を理解し、自らの言葉で作品の価値性について論じようとしている点である(無論、こうした姿勢こそが卒業論文に当たる生徒達に最も要求したいもののだが)。参考にしてもらいたい。

(松田 隆)